

「イスラエル建国史」

5 オスマントルコ帝国 衰退の時代

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒業。

イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968~2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書:『ユダヤ解説のキーワード』新潮社、ユダヤを知る事典』東京堂出版など多数。

オスマントルコ帝国の統治形態

1800年代は、オスマントルコ帝国の衰退が加速していく時代であった。換言すれば、後退するトルコを押しつけてヨーロッパ列強が、中東へ進出してくる。

一時はハンガリーまで版図下に入れたオスマントルコは、反撃されて1699年にカルロヴィッツ条約に調印してハンガリーから撤収し、それを皮切りに後退を重ね、1870年代末までに、ほぼヨーロッパから駆逐されてしまった。エジプトを中心とする北アフリカも、トルコの威令が及ばなくなり、1811年には事実上の独立状態になった。それに追いつけをかけるように、トルコが任命したはずのパシャ、ムハンマド・アリが1831年に蜂起して(第1次トルコ・エジプト戦争)、エレッツ・イスラエル(現在のイスラエル、ウェストバンク、ガザを含む地域をさす)を占領した。トルコ軍が反撃して1840年に奪回するが、ゆるんだタガを締め直すため、奪回地の行政区域は、オスマントルコ政府の内務相直轄となった。

1516年にエレッツ・イスラエルを



オスマントルコ帝国版図

む地中海東岸域を征服したオスマントルコは、この地域をサンジャック(郡)と称する行政区域に分けた。サンジャックの原意は軍旗で(旧日本軍でいえば連隊旗)、最初は軍管区であり、徳川時代初期の藩に似たところがある。サンジャックの長はワーリ(地方行政長官)といった。

結局エレッツ・イスラエルは、北からツファット、ナブルス、エルサレム、ガザをそれぞれ中心地とする4つのサンジャックにまとめられた。後年、その上部の行政単位としてヴィラヤト(県)が設けられ、エレッツ・イスラエルは、 Damascus・ヴィラヤト、アッコ・ヴィラヤトの二つで区分されるようになった。前者は現在のレバノンの一部を含み、後者は現在のシリアのハウランを含んでいたため、ムスリム住民の流入がかなりあった。

1800年時点で、エレッツ・イスラエルの人口は、30万足らずであった。内訳はユダヤ人約5千、キリスト教徒約2万5千で、残りは大半がスンニ派のムスリムであったが、既述のようにドルーズ、チェルケスの少数民族や、クルド族も居住し、ムスリムもシリア、エジプトのほか遠くボスニアから来た集団もあった。40年後(すなわち、トルコがこの地域を奪回した年)、ユダヤ人の数が倍増した以外、ほとんど変わっていない。

ユダヤ人社会の分類

ユダヤ人社会は次の4系統に分けられていた。

- (1) アシュケナジ(12世紀以降の移住者)
- (2) スファルディ(1492年のスペイン追放で逃げて来た人々)
- (3) マグレビ(北アフリカからの移住者)
- (4) ムスタラブ(ローマによる第2神殿破壊後も現地に踏みとどまった人々の子孫)

それぞれに礼拝方式が少しずつ違い、ムスタラブとマグレビが精神的には指導的立場にたっていたが、次第にアシュケナジが主導するようになった。各地域社会は、それぞれコレリムと称する管理組織を持ち、そのヴァアド(委員会)が支援金を分配した。コレリムは1800年代中頃に30ほどが確認されている。住民の誕生、死亡、結婚、離婚を、ここで記録したのである。ちなみに支援金はハルカーと称し、ヨーロッパなどのユダヤ人社会から送られてくる寄付であった。換言すれば、この支援金で生活する人々がいたということである。

欧米キリスト教社会の進出

キリスト教徒社会は、主としてギリシア正教会、ギリシアカトリック教会、ローマカトリック教会の各信徒社会であった。

英米のプロテスタントは、1800年代の初めから聖地における布教活動の許可を求めている。トルコ当局は認めなかった。しかし、ムハンマド・アリの支配時代(1832~40年)、エルサレム、ベツレヘム、ナザレその他キリストゆかりの地に、教会のほか学

校の建設が認められた。例えばドイツの Templar 騎士団は、1868年にエルサレム、ヤッフォ、ハイファ、サロナに施設を設けている。

1840年、第2次トルコ・エジプト戦争でエジプトは敗北し、再びトルコの支配が戻ったが、欧米列強の進出がいよいよ顕著になる。それは聖地保護、教会支援の形をとって進出してくるのであるが、その傾向は、既にその70年前にみられる。一番象徴的なのが、ナポレオンのエジプト遠征(1798年)である。地中海東岸域にきたナポレオンは、アッコ占領に失敗して、聖地確保の夢はかなわなかった。

ロシアの執念もすさまじい。クリミア戦争(1853～56年)は、聖地の保護、をめぐる仏露の対立が遠因と言われるが、ロシアはその前の第1次露土戦争の結果、1774年にトルコとクチュク・カイナルジ条約(ブルガリアの地名にちなむ協定)を結び、黒海沿岸のトルコ領の一部を手に入れたほか、教会の保護権を得て、干渉手段を確保した。すなわち、アラブ系ギリシア正教会信徒とエルサレムの大主教保護権を行使して、聖地介入を行うのである。

フランスは、第2次露土戦争後開



エジプトに遠征したナポレオン

催のベルリン会議で条約が締結され(1878年)、このベルリン条約第62条で、トルコ帝国領内のローマカトリック教会を保護する地位を確保した。

一方イギリスは、一時エレッツ・イスラエルを支配したエジプトのパシヤから領事館設置の許可(1838年)を得たが、第2次トルコ・エジプト戦争時、ユダヤ・ドルーズ両社会の保護国として行動した。そのイギリスはスエズ運河の株式を買収し(1875年)、ついでエジプトを占領して(1882年)、進出基盤を固めた。

近代的なシステムの導入

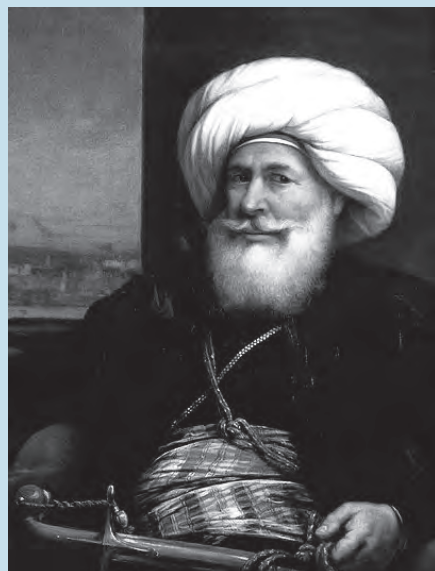
欧米のプロテスタントによる聖地の布教活動で、改宗者の数はとるに足りなかったが、教会は学校教育、医療、福祉の面で大いに力を入れ、その影響で、ローマカトリックやギリシア正教会、そしてトルコ政府も、この分野に力を入れるようになった。

19世紀は、近代的なシステムが徐々に導入された時代であった。第1が蒸気船の運航開始(1830年代)で、ヨーロッパからの聖地巡礼が、便利になった。トルコ政府が、道路の整備につとめ、エルサレムとヤッフォを結ぶいわゆるエルサレム街道に、駅馬車を走らせるようになり(1868年)、さらに治安維持に力を入れ始めたので、聖地巡礼は前よりも安全で、楽になった。それまで街道荒らしが横行

し、巡礼も命がけであった。悪しき既得権も廃止された。エルサレム西方に、アブゴシュというアラブの村があり、今では観光名所の1つになっているが、ここでチェルケス族の族長が交通税をとりたて、自分のふところに入れていたのである。1837年には、オーストリアとフランスが、トルコのアジア地域における郵便事業権を得て、コンスタンチノープルと各サンジャックの中心都市を結ぶ郵便サービスを始めた。し

かし当時は、6週間に1度の配達であった。郵便事業は19世紀後半になって、トルコ政府が引き継いでいる。

もっと便利なのが、電報制度の導入(1865年)である。郵便の方は、官営になって配達頻度が増えたものの、集配に杜撰なところがあったが、電報は正確でしかも伝達速度が全く違うので、ヨーロッパと聖地との交信は、こちらが重用された。イスラエルの再建運動は、このような時代背景と環境のもとで始まった。その時点(1880年)とすれば、当時のエレッツ・イスラエル人口は45万。ユダヤ人2万4千、キリスト教徒4万5千、残りはさまざまな地域から来たムスリムと少数民族であった。



ムハンマド・アリ(1769?～1849年)



初期の蒸気船

*滝川義人氏による「イスラエル建国史」1～4は、『イスラエル・トゥデイ』(7月をもって休刊)4月号～7月号に連載されています。購入ご希望の方は、お申し込みください。

1冊500円(送料100円)